



苗一つひとつに思いを込める 中江農園 中江一泰さん

CONTENTS

クローズアップ この経営者！…………… 2 ページ
オーダーメイドの花苗づくりを実践
— 誰もが働きやすい環境にも配慮 —
中江農園（京丹後市）

チャレンジ農業法人…………… 4 ページ
「丹波高原ねぎ」と作業受託 両輪で地域農業を支える
— 養液栽培で周年出荷、託されて農地も担う —
有限会社 オアシスランド（京丹波町）

農業簿記と農業法人設立の2講座を開催…………… 6 ページ
京力農場プラン 今後の施策の要件！…………… 7 ページ
緊急要請書 京都府副知事に手交…………… 7 ページ
農業法人ニュース…………… 8 ページ
— 京都府農業法人経営者会議の取り組み —
■ 令和2年度「経営力向上セミナー」
■ 近畿農政局長との意見交換会
編集局から…………… 8 ページ

クローズアップ

この経営者！

オーダーメイドの花苗づくりを実践

——誰もが働きやすい環境にも配慮——



世代をつなぐ 父・泰之さん(左)と一泰さん

京丹後市・中江農園

中江 一泰さん(31)

父と祖父から苗づくりを教わって10年目、いまではホームセンターなど得意先の営業も一手に引き受ける。なかでも花苗は、こだわりの土で育て、顧客の要望に合わせて調製したオーダーメイドが自慢だ。その一方で、みんなが心地よく作業ができる環境を整えるなど、経営継承にむけて感性も磨いている。

顧客ニーズに機敏に対応

京丹後市のJR網野駅から車を走らせるとすぐ、ずらりと立ち並ぶハウス群が見えてくる。一泰さんは代々、丹後地方では最大級の野菜苗・花苗を専門に扱う中江農園の4代目だ。

大学卒業後に就農し、父・泰之さん(57)、母・明子さん(55)と祖父母の家族5人、常時5～6名のアルバイトとともに、大小ハウス18棟(計35a)で年間約100万



地域を花苗生産地にしたい

ポットの苗を生産。取り扱う苗は、野菜と花を合わせて約40品目、200品種近いという。

農園が手がける花苗の“売り”は「オーダーメイドの苗づくり」。「日持ちがよい小ぶりの苗の注文が多いのですが、取引先によって希望される大きさや葉っぱの枚数が違う



オーダーメイドのポット苗

ので、気を遣います」と一泰さん。多品種を取り揃えたい園芸店のオーダーから、台木の種類や接ぎ木手法を指定するプロ農家の注文まで、幅広いニーズに応えている。

良質な苗は土づくりから

顧客それぞれのリクエストには柔軟に応じても、床土づくりだけは譲れない一泰さんのこだわりがある。4年前に「これだ!」という土に出会い、新潟から取り



土づくりが生育のカギを握る

寄せ始めた。土代はかさんだが、その分立ち枯れ病、肥料あたり、徒長などによるロス率が低減したことで相殺され、さらにより良質の花がつくようになり、現場のモチベーションも上がった。

また、手間はかかるものの、ポット一つひとつに追肥を行うことで品質が向上。品評会ではパンジーやビオラ苗で、これまでに京都府園芸商組合理事長賞、農林水産省近畿農政局長賞などを受賞している。

一方、野菜苗の土は農園でつくっている。春先にパーク材、もみ殻などをすき込み、そのつど肥料を入れて約10か月土床で寝かせた後、12月にトラクターでおこし、手押し車で倉庫へ土を運び込む。「これが毎年の締めくくり行事です」と笑う。いつも正月の倉庫は背丈まで積み上がった土でいっぱいになり、3か月ほど熟成させれば完成だ。

心地よい環境で効率アップ

顧客それぞれのオーダーに合わせて出荷するためには、細やかな顧客管理が欠かせない。分厚いファイルには、取引先ごとの播種計画や担当者、実施日時が分かる綿密な記録表が収められている。管理担当は基本的には一泰さんだが、家族の誰が見ても分かるよう、予定をカレンダーに書き写す「見える化」を心がける。

また、春の繁忙期には、臨時に14~15人ほど主婦や学生のアルバイトを雇用している。作業内容を分かりやすく指示することはもちろん、作業中は好きな音楽を自由に聴けるようにしたり、休憩中にはコミュニケーションをとるなど、ストレスなく働いてもらえる

よう細かい配慮を欠かさない。「心地よい作業環境ではみんなの生産効率も上がり、ひいては人件費の節減にもつながっている」と経営者の表情をのぞかせる。

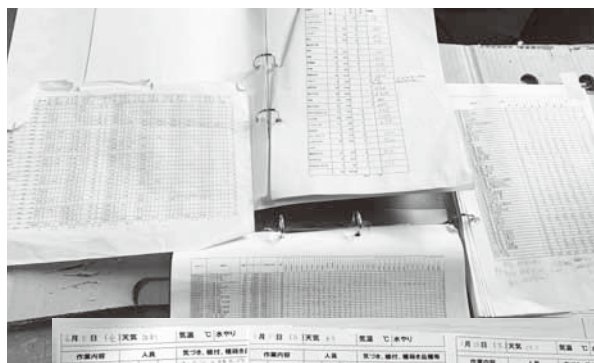
みんなで“農業を楽しむ”

販売先は、地元の農家や園芸店、J Aをはじめ、近隣の舞鶴市、豊岡市、さらに京阪神方面の大型ホームセンターなど広域に及ぶ。ホームセ

ンターは常時4カ所を確保するよう心がけている。

一泰さんは「目標は売上1億円」といえるような農園をめざしたい」と、取引先ごとに具体的な出荷数や販売額をはじく。SNSやYouTubeを活用したPRも検討中だ。そんな姿に、父の一泰さんは「自分は3歳のときに経営を引き継いだ。そろそろ息子に任せて自分はサポート役に回りたい」と口元が緩む。

仲間の若手経営者からは“経営理念をつくれ”と勧められているそうで、「ともに働く人たちも農業を楽しんでもらいたい。“農業を楽しむ、楽しみの輪をつなぐ”かな」と一泰さん。出荷した花苗をTDLやUSJに植えてもらい、みんなでその花を見に行くのが夢だという。



月	日	天候	気温	作業内容	人員	時間	備考
1	1	晴	15℃	花苗の播種	1人	10:00~12:00	
2	2	晴	16℃	花苗の播種	1人	10:00~12:00	
3	3	晴	17℃	花苗の播種	1人	10:00~12:00	
4	4	晴	18℃	花苗の播種	1人	10:00~12:00	
5	5	晴	19℃	花苗の播種	1人	10:00~12:00	

管理の基本は「見える化」 綿密な記録が書き込まれている

「丹波高原ねぎ」&作業受託 両輪で地域農業を支える

— 養液栽培で周年出荷、託されて農地も担う —



年間を通じて安定雇用を実現（中央が大崎さん）

有限会社 オアシスランド 京丹波町

- 代表取締役 大崎克巳
- 設立年月 1992年8月
- 資本金 300万円
- 労働力 役員2名、社員2名、パート4名、臨時アルバイト4～5名
- 事業内容 「養液栽培による『丹波高原ねぎ』の周年栽培」
養液栽培施設：2,400㎡、集出荷施設：132.5㎡
丹波米：6ha、WCS：1ha、黒枝豆：1ha、黒大豆：3ha
九条ねぎ（露地）：50a、作業受託：1ha

いち早くネギの養液栽培に挑戦

京都縦貫自動車道の丹波ICを降りてしばらく行くと、山あい田園風景が広がる。（有）オアシスランド代表取締役の大崎克巳さん（56）は、この地で生まれ育った。

法人設立は古い。大崎さんは府立農業大学校を卒業し地元の農協に7年間勤務。実家の農業を継ごうと考えていた矢先に、当時まだ珍しかった水耕栽培について勉強する機会を得る。そこで「夢のある農業モデルをつくろう」と呼びかけられ、1992年、町のバックアップを得て、仲間2人とともに会社を設立し、ネギの養液栽培に乗り出

した。「水耕栽培といえばトマトかミツバというイメージが強かったが、ネギなら周年出荷と雇用ができると思った」と振り返る。

当初は3人による共同経営だったが、責任の所在を明確にするため、2004年以降はそれぞれが自立して、オアシスランドと委託契約を結ぶ経営方式に移行している。



山あいの“オアシス”に
（大崎さんと妻の栄美子さん）



日量300kgのネギを出荷



全部で56列、栽培ベッドがずらりと並ぶ



「ASIAGAP」認証を取得

施設内には絶えずコポコポという水音が響く。社名のオアシスとは砂漠で湧き出る「水」のイメージが由来だ。4連棟の施設で生産しているのは、九条細系の葉ネギ「丹波高原ねぎ」。全部で56列ある栽培ベッドでは、数列置きに生育段階の違うネギがすくすくと伸びている。

肥料濃度やPH、温度、ポンプの運転時間やカーテンの開け閉めまで、栽培環境はすべてコンピュータで管理。夏場は45日、冬場は90日で収穫でき、各コンテナで時期をずらしながら栽培することで年6回転を可能にし、年間を通して安定出荷を実現した。

「丹波高原ねぎ」は、通常のネギに比べてぬめりや匂いが少なく、家庭用の薬味としての需要が高い。出荷先は京阪神のスーパーと市場がほぼ半々。スーパー2社と契約栽培を行っており、法人の年間生産額約4,000万円、このうちネギが年間生産額の約7割を占める。

「病害虫が発生しないよう耕種的防除に取り組み、できるだけ農薬を減らして栽培をしている」と大崎さん。

2019年には「ASIAGAP」認証を取得し、安全な農産物を消費者に届けるため「農場の生産工程管理」のレベルアップに取り組んでいる。

兄弟で農地守る「担い手」に



オアシスランドのメンバーたち

また、両親が水稻栽培を行っていた農地では、弟の幹浩さん(49)「おおさき農産」が丹波米(コシヒカリ・キヌヒカリ)や黒大豆などの生産を。加えて作業受託が10ha以上あるが、高齢化や離農により空き農地は増える一方で、大崎さんは「毎年1haくらい依頼が舞い込んでくる」という。

しかも耕作を頼まれる農地は整備された圃場ばかりではないうえ、獣害対策の苦勞も絶えない。「3年に一度は浸水してしまうところとか、毎年シカに食われてなくなる農地もある」。一部補助金が出るとはいえ防護柵の設置などで費用がかさみ、「お金を払って農地を引き受けているようなもの」と苦笑いする。

増え続ける空き農地をいかに担っていくのか。「それは地域の将来に向き合うこと」だと大崎さんは思っている。

魅力ある農業像を次世代へ

地域では人や農地の空洞化が進み、大崎さんは「人が減って、活気がなくなるのがなにより心配」と気をもむ。だからこそ、子どもたちには地元に住ってほしいし、オアシスランドを引き継いでもいいと思ってもらえるような経営を維持し、発展させていきたい」という思いは強い。かつて自分たちが養液栽培に挑戦したように、「魅力ある農業を实践し、若者たちが“夢のある農業”に挑戦するのを応援したい」と感じている。



「地域の農地を守っていききたい」(左は弟の幹浩さん)

農業簿記と農業法人設立の2講座を開催

【法人会計・パソコン農業簿記講座】

府農業会議は12月に宇治市と綾部市の2会場で「法人会計・農業簿記講座」を開催。農業経営者や従業員など18名が参加しました。

この講座は、青色申告や経営分析に必要な複式簿記による決算書作成の修得を目指して、毎年実施しているもの。

1日目は、農業者の支援に経験豊富な税理士の講師が、日常の仕訳入力から決算書作成に至る“簿記一巡”の処理を丁寧に説明。2日目は、ソリマチ(株)を講師に、農業簿記ソフト『ソリマチ農業簿記』を使い、パソコンによる入力を研修しました。

受講者からは、「収入保険制度に加入するには青色申告が必要だが、見通しがついた」、「過去の収支が記録され、経営分析できることがわかった。講座をきっかけに取り組みたい」との声が聞かれました。



税理士の講師が丁寧に説明



パソコン入力を実践

【農業法人設立講座】

府農業会議は1月に南丹市と宮津市の2会場で「農業法人設立講座」を開催。集落営農組織の役員や法人化を検討する個人農業者ら19名が参加しました。

それぞれの会場では、農業法人の設立に習熟した税理士（会計や財産の移転処理）、司法書士（登記手続）、社会保険労務士（労務管理、各種社保の手続き）が、丁寧にポイントを説明しました。

府内では現在約380の農業法人があり、毎年約20法人が新たに設立されています。

農業会議では、この講座や「農業経営相談所」の専門家派遣を通じて、法人化を支援しています。皆様の御利用をお待しています。



司法書士による講義（南部会場）

**収入保険
制度**

経営はあなたの選択で守る時代に 収入保険は経営安定の必需品

収入保険は農業保険の中でもすべての農産物を対象品目とし、自ら生産した農産物の販売収入全体が対象となる保険です。経営内容に応じて加入方法が選べます。

収入が減少するさまざまな要因が補償の対象です

自然災害、市場価格の下落、災害で作付不能、病気で収穫不能、倉庫の浸水、取引先の倒産、盗難や運搬中の事故、為替変動で大損 など

青色申告をしている農業者が対象です

農業者が支払う保険料、事務費は半額、積立金は3分の2を国が補助します

無利子のつなぎ融資で経営の負担を軽減できます

収量の減少、価格の低下により収入が減少した場合、保険金が支払われるまでに無利子で融資を受けられます。加入条件や補てん内容など詳しいことは、京都府農業共済組合の各支所にお問い合わせください。

お問い合わせは
こちらまで

山城支所 TEL. 0774-62-8611 京都支所 TEL. 0771-63-2951
中丹支所 TEL. 0773-42-8800 丹後支所 TEL. 0772-62-6521
本 所 TEL. 075-222-5700

京力農場プラン 今後の施策の要件！

令和2年12月末の状況明らかに

令和3年度以降、農業法人や認定農業者等の担い手が国の施策を利用する時の要件になっている『実質化された人・農地プラン（京都府は「京力農場プラン」）』の令和2年12月末時点の状況がこのほど明らかになりました。

市町村が既存の京力農場プラン（以下、プラン）が実質化されているかを判断。実質化されていない集落は、実質化のための「工程表」が修正・追加されて公表されています。

「工程表」は、①アンケートの実施、②現況を示した農地地図の作成、③関係者による話し合いの3つのステップを計画しています。全てを満たすことでプランが実質化され、施策を利用する要件を満たします。

今回、府が明らかにした状況では、「工程表」を含んだプランによる集落カバー率は90.8%になりました。これは、府内1,684集落のうち1,529集落に対して、今後の農業振興に係る国等の施策が重点的に行われることを意味しています。

今後、「工程表」に基づいて、各市町村や農業委員会が地域での話し合いを繰り返すことになります。この話し合いに、市町村は担い手への参加を呼びかけ、今後の農地利用の意向等を担い手どうしが共有したり、農業委員会の委員と集積・集約の調整を図ったりすることが求められています。

委員の地区連が話し合う場に

先行する地域では、既に府農業会議の現地推進役が市町村・農業委員会・担い手等の関係者をつなぎながら、この取り組みの支援が始まっています。

京丹後市久美浜町では、平成28年に発足した「久美浜地域会議」で毎月、農業委員会の委員が情報を共有しながら地域の課題について話し合っています。地域会議では、発足直後に大規模農家がリタイアしたことを契機に、農業法人11社が参画「久美浜ネットワーク」として、農地集積・集約が定期的に話し合われており、農地中間管理事業の活用やプランの実質化につながっています。

こうした農業委員会の話し合いは、現在、府内25市町村に拡大し、昨年12月末で160を超える地区連絡会議が設置されています。

プランの実質化では、これから、地区連絡会議が話し合いの舞台となります。市町村や農業委員会、関係機関が担い手との連携・協力を深めて、各地域が100年先も存続する農場へと転換する取り組みが期待されています。



久美浜町佐野南の地域会議(令和2年2月)農業法人どうしの農地集積と農業委員会委員による地権者への働きかけが一気にまとまった

緊急要請書 京都府副知事に手交

京都府農業法人経営者会議では、7月1日、「新型コロナウイルス感染症による影響に関する緊急要請書」を山下副知事に手交されました。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の流行、拡大により京都府の農業経営者の多くが想定しなかった影響を受けました。

加えて、大型台風、大雨被害、豪雪等からの復興がまだ終わらない中、新たに新型コロナウイルス感染症の拡大となり、農業経営者の自主努力だけではその対応も困難となってきたことから、京都府に対し、



山下副知事へ要請書を手交

既往債務者に対する借入金の返済猶予、農産物の安定供給のための事業継続計画（BCP）の策定等、新型コロナウイルス感染症拡大への警戒と経済再生に加え気象災害への対応と農業経営が継続出来るよう緊急要請が行われました。

（公益社団法人日本農業法人協会／アグリビジネス経営塾から）

*災害から事業をどのように復旧・復興するかを定めるのが、事業継続計画(Business Continuity Plan、以下「BCP」です。)

緊急事態が発生した際に、どの程度の事業の遅延を許容し、どの事務を優先し、だれが、こういった順序で対応を行うかなどの戦略や方針を示した計画のことです。

BCPを策定するメリットは、災害にどのように備えるか明確化することで、経営の安定感を対外的に示し、取引先からの信用獲得に大きく貢献することです。

農業法人

ニュース

—京都府農業法人経営者会議の取り組み—

■令和2年度「経営力向上セミナー」

11月10日、キャンパスプラザ京都において、星野リゾート 代表 星野佳路氏を迎え、京都府農業法人経営者会議会員、賛助会員、農業経営者等128名の参加を得て、「経営力向上セミナー」を開催しました。

今回のセミナーは新型コロナウイルス感染症の影響もあり、会場収容人数の50%以下で運営しました。

第1部は、星野代表が「これからのビジネス戦略～星野リゾートの事業及び新型コロナウイルスが観光業に与えた影響について～」と題して講演。

第2部として、星野代表と京都府農業法人経営者会議 山田会長により、「経営者としての考察すべき消費者ニーズや社会戦略、経営戦略」について対談しました。

参加者からは、「今後の事業戦略、社員との関わり方や育成、次世代への事業継承、持続可能な経営等、とても勉強になった。」「どの分野にも通じる内容だった。」「経営者として役に立つ講演だった。」

等の意見が出ていました。



第1部 講師：星野リゾート
代表 星野佳路氏

第2部 対談
星野代表 山田会長



■近畿農政局長との意見交換会

12月4日、ホテルセントノーム京都で近畿農政局長と京都府農業法人経営者会議役員との意見交換会を開催し、役員11名が参加しました。

毎年、近畿農政局と京都府農業法人経営者会議会員との意見交換会を開催していましたが、今年は新型コロナウイルス感染症の流行のため、参加者を絞りこみ、近畿農政局長と役員との意見交換会としました。

意見交換会では、米の需要・生産（米の生産生業、輸出の促進）、京都府農業（強み、課題）、人・農地プラン（法人の参加状況）、中間管理事業／農地バンク（法人の利用状況）、エネルギー対策、農道整備、鳥獣害対策、各種補助金等について意見交換しました。

意見交換では、「プランが行政内部に留まっており、農地の使用者、所有者まで周知されていない。耕作放棄地を地域としてどうしていくかをしっかりと話し合う必要がある。」「中間管理事業が地権者に充分周知されていない。」「中間管理事業を利用するメリットは自分で地権者を探さなくても良いところ。実際は借りる側が貸す側を説得しなければならない。」「借り手が中間管理事業を活用したくとも貸し手が面倒がる。」「10年後、20年後の農業がどのようになるかわからない。行政が10年後、どのようにしたいのかビジョンを示して進めてほしい。」等の意見が出されました。



近畿農政局 大坪局長



編集局から

◆コロナ禍第3波が押し寄せ、今年の生産に向け準備をすすめる中、まだまだ予断を許さない状況が続いています。

今回は、京丹後市で花苗、野菜苗を生産し、地域の農業後継者として頑張っている中江農園と京丹波町で地域の雇用と農地を

守って頑張っている(有)オアシスランドを取材しました。

お二人の経営者は、地域での雇用拡大や消費者ニーズにあった生産をテーマに農業経営に取り組んでいました。

課題は、後継者支援と販売ルートの確立とお聞きしました。今後の活躍を期待しています。

発行／2021年3月

発行者 (一社)京都府農業会議

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内 TEL.075(417)6847